



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレ ター 第601号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン
ターニューズレター 第601号. 京大東アジアセンターニューズレター
2015, 601

ISSUE DATE:

2015-12-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202912>

RIGHT:

2015 年 12 月 28 日発行 第 601 号

CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ	2
読後雑感：2015 年 第 28 回 <小島正憲>	3
【中国経済最新統計】	10

日本語 | 中国語 | English

京都大学 経済学研究科 東アジア経済研究センター (旧上海センター)
Center for East Asian Economic Studies, Graduate School of Economics, Kyoto University

Home 研究概要 組織構成 活動状況 最新情報 会員募集 お問い合わせ 検索

最新情報

- 2015.06.26 【お知らせ】「中国経済研究会」のお知らせ
- 2015.06.26 【お知らせ】シンポジウムのお知らせ
- 2015.05.20 【お知らせ・イベント】中国経済研究会のお知らせ
- 2015.05.20 【お知らせ・イベント】「中国経済研究会のお知らせ」
- 2015.05.07 【イベント】第13回 アジア中古筆流通研究会のお知らせ

more

News Letter

Vol.577
2015.07.08

最新号

バックナンバー

Go more

研究会 シンポジウム・講演会・セミナー 会員募集 寄付のお願い

アクセス リンク集 プライバシーポリシー サイトマップ

Copyright (C) 京都大学経済学研究科「京大東アジア経済研究センター」, All Rights Reserved.

「中国経済研究会」のお知らせ

2015年度第8回（通算第54回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016 年 1 月 19 日(火) 16:30－18 : 00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下 1 階 みずほホール
AB

テーマ：「中国民族系自動車メーカーの環境適応的成長戦略」

報告者：李 澤建(大阪産業大学経済学部准教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2015年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月24日（金）、 6月5日（金）、 6月13日（土）、7月28日(火)

後期：10月20日（火）、11月17日（火）、12月1（火）、**1月19日（火）**

(この研究会に関するお問い合わせは劉徳強 (liu@econ.kyoto-u.ac.jp) までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。)

読後雑感 : 2015年 第28回

25, DEC. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員 小島正憲

1. 「お金は歴史で儲けなさい」 2. 「家族という病巣」 3. 「死はこわくない」
4. 「人間は死んでもまた生き続ける」 5. 「人は生まれ変わる」 6. 「老いた親を愛せますか」 7. 「へろへろ」

1. 「お金は歴史で儲けなさい」 加谷珪一著 朝日新聞出版 2015年1月30日

帯の言葉:「投資は20世紀に学べ! 10回のバブル、4回の戦争、経済統制、ハイパーインフレ、世界恐慌、大災害…」

本書の最終ページには、ごく小さな文字で、「本書は投資を勧誘するものではありません。投資の判断は自己責任で行ってください」と、但し書きが付けられている。また、著者の加谷氏は、「株式投資は、参加した人の8割が失敗して退出していくという非常に厳しい世界です」、したがって、「投資の世界で勝ち続けるには、自分の感情や他人の意見だけに頼っているのは危険であり、歴史という客観的な英知を利用する必要があるのです」と主張している。私も投資に限らず、ビジネスには情勢を読み抜く力が必要であるし、そのために歴史から学ぶことがきわめて重要であると考えている。昨今の中国のデイトレーダーを見ていると、スマホで数日間の株価の変動を追い、秒単位で売買を繰り返している。本書で加谷氏は本書で、「投資で重要なのは、株価よりも時間」と言い、「100年単位の株価の動きを見ること」だと主張している。秒単位と100年単位、それはまさに正反対の行為である。私は投資を全く行わないが、加谷氏の説を支持する。

加谷氏は本書で、「経済や株価の長期的な動きには、人間の心理というものが、大きく影響している」、「バブル経済は人々の期待が作りだす現象ですし、戦争も極めて人間的な出来事といってよいでしょう。さらにいえば、通貨というものは、究極的な共同幻想であり、その存在は、人の心理に大きく依存しています」、「究極的に経済を動かす原動力は人の心理ということになり、人の心理にはある程度の法則性を見出せる可能性が高いのです」と書いている。私も、経済は人々の共同幻想によって左右されると思っているし、指導者がその共同幻想をうまく作りだせば、経済は好転すると考えており、加谷氏の主張に同感である。また加谷氏は、ひところ流行った金融工学について、「プロの投資家の世界においても、テクニカルな手法を投資の参考に使っている人が多いというのは厳然とした事実なのです。おそらくその理由は、テクニカルな分析手法の中に、人間の心理を背景にしたものが含まれており、人間の心理にはある程度の法則性が存在する可能性が高いと考えられているからです」と書いている。これも納得のいく解説である。

加谷氏は、「太平洋戦争の戦費は国家予算の70倍であり、この戦費はすべて日本国内で、しかも日銀の直接引き受けによって調達されています。ロンドンやニューヨークの金融市場で市場メカニズムに沿って戦費を調達した日露戦争とは大きく異なっています。日銀による引き

受けは、輪転機を回しているだけです。無限に資金を引き出すことができます。結果として日本はハイパーインフレになってしまいました」と書いている。引き続き加谷氏は、「日清戦争と日露戦争では、巨大なバブルが発生した。太平洋戦争時には、経済の国家統制が行われた。だが、統制下の株式市場は思いのほか堅調に推移した」と書いているが、この部分については、検討を要すと思う。

加谷氏は中国のバブル経済について、「中国政府は日本のバブル崩壊や米国のリーマンショックという先例を研究し尽くしています。現在、中国政府は、経済成長を犠牲にしても、不良債権の処理を最優先する方針で経済政策を進めています。つまり、中国政府は、中国经济が完全にバブル崩壊の瀬戸際にあることをよく理解しているのです。ソフトランディングを目指す中国の政策がうまくいくかどうかはわかりませんが、少なくとも、これ以上バブルが拡大するような方向性にならないことだけは間違いありません」と書いている。

加谷氏はビットコインについて、「ビットコインが金本位制に近い存在なのだとすると、ビットコインは今後、金と同じような値動きをする可能性があります。つまり既存通貨に対する信用が低下すると買われ、既存通貨への信用が高まると売られるという図式です。ビットコインをポートフォリオの一部に組み入れようと考えている人は、このあたりについて考慮にいれておくとういでしょう」と書いているが、この提言の良否については、私には分からない。

2. 「家族という病巣」 星野仁彦著 セブン&アイ出版 2015年7月21日

帯の言葉：「“家”という重荷に苦しんでいる人たちへ」

私は死生観を学ぶつもりで、本書を購入し読んでみたが、残念ながらその目的は果たせなかった。しかし、この本を読み進めて行くうちに、今までとは違う視点から、自らの人生を省みることができるようになり、たいへん参考になった。

著者の星野氏は、「強調しなければならないのは、“発達障害＝脳の生来性の脆弱さ”と“機能不全家族＝養育環境”のどちらか一方のみであれば、それほど高いリスクを生じることはないので、両方の相互作用によって、さまざまな精神障害が生じるリスクがきわめて高くなるという点です。それだけ、子どもの発達にとって養育環境、すなわち“家庭・家族”の及ぼす影響力は大きいということです」と書いている。そして、そのリスクが表面化した例として、ヒトラーやダイアナ妃、尾崎豊、「少年A」、宅間守などをあげて詳述している。またそのリスクをうまく止揚した例として、夏目漱石、モーツァルト、山下清、チャーチル、さかもと未明、トム・クルーズなどをあげて、その好結果を含めて詳述している。

星野氏によれば、発達障害には、「高機能自閉症を含む“自閉症スペクトラム障害”(広汎性発達障害とも呼ばれる)、自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群などをはじめ、落ち着きのなさ、忘れっぽさ、衝動性などの特性がみられる“ADHD”(注意欠陥・多動性障害)、特定の学習(計算、読書・書字など)の能力に支障がみられる“LD”(学習障害)などの種類があります」と書いている。また機能不全家族とは、「家族一人ひとりが生活を送る環境において、また子どもが養育される環境において、“ゆがみ”つまり“家庭内不和がある”ということだと書き、「健康家族の3条件」として、「①夫婦間同盟がしっかり結ばれていること、②世代間境界が確立されていること(それぞれの領分を侵して、異世代の人が影響力を示そうとしないこ

と)、③性別役割が明確化していること(男性モデルとしての父親=いざという時に頼れる存在、女性モデルとしての母親=家族一人ひとりが気兼ねなく寄り添えるような包容力と、彼らの心に元気と勇気を与えるような、太陽のような明るい存在)」と書いている。

星野氏は、「“発達障害”のある人の多くは、ストレスがかかった時に、それをうまく発散させたり、考え方を切り替えたりして乗り越えることが非常に苦手です。そうしたタイプの人々が、“機能不全家族”のなかで育ったらどうなるでしょうか。幼いころから普通の人以上に過大なストレスを受けながら、一方で、人一倍ストレス処理能力が低いために、それをうまく解消できないまま発達を続けていくことになります。そのような子ども時代を過ごしたら、やがて心にゆがみが生じてきても不思議ではありません」と書いている。この解説には納得がいく。しかし星野氏は、発達障害も機能不全家族も、その判断基準を明確に指摘していない。私は、それらは程度問題であり、少々ずつならば万人が等しく持っているものでないかと考えるし、それが個性の源になっているのではないかと考える。

私も、若干「発達障害」気味であったし、少し「機能不全家族」の中で育った。つまり「発達障害」と「機能不全家族」の両方の要素を、若干ずつ持っており、星野氏に言わせれば、ある程度、精神にゆがみが生じるリスクがあったことになる。私は、小さいころ「高所恐怖症」であり(大人になってすっかり治った)、中学の頃、たまたまクラス全員が受けた大学の心理学テストで、「精神異常」を指摘され再検査に回された(30歳代になり、内田クレペリン精神反応検査を受け、強靱な精神力の持ち主と高く評価された)。また小さいときから、寝ている時に見る夢は常にオールカラーであった(これは現在も続いている)。しかも小学生のときは、「落ち着きがない」といつも先生に叱られていた。その上、私の父母はいつも喧嘩をしており、仲良くしていたところを見たことがなかった。ことに父の女性関係は派手であり、母がいつも泣いて怒っていたことを覚えている。私はそのような父親を憎んで育ったし、母親は私を溺愛した。私は母子密着型だったと思う。これらのことから私は、星野氏に言われるまでもなく、「自分の性格に歪みが生じていても不思議はない環境であった」と自覚している。おそらく、私の異端児的性格は、これらの影響を受けたものであろう。

3. 「死はこわくない」 立花隆著 文藝春秋 2015年12月10日

帯の言葉：「がん、心臓手術を乗り越えた75歳のいま そのとき私たちが何を感じるのか が分かってきたー」

私は、今年、自分自身の死生観を確立するために、多くの書物を読み、宗教学者の講義を聴き、即身仏の調査を行ってきた。そしてこの年末に、日本の「臨死体験研究」の第1人者の立花隆氏の近著に接することができ、たいへん嬉しく思っている。立花氏は本書の最後で、「科学がどれほど進んでも、新たに“分からない”ことが出てくる。この“分からなさ”は、自分が死を巡る哲学で悩んでいた若い頃の“分からなさ”と実は大差がないように思います。人間とは何か。生とは何か。死とは何か。その謎を問い続けていくのが人間なのかもしれません」、「“生とは何であり、死とは何であるのか”は、人が生涯追いかけてざるを得ない難問である。答えは年齢によってかなり、あるいは微妙に変わってくる。これはわたしが75歳の時点でえた答案である」と書いている。つまりこれが、現在の立花氏の死生観である。

立花氏は、「死後の世界が存在するかどうかは個々人の情念の世界の問題であって、論理的に考えて正しい答えを出そうとするかどうかの世界の問題ではない」と書き、ヴィトゲンシュタインの「論理学哲学論考」の中から、「語り得ぬものについては沈黙せねばならぬ」と文言を引用し、「死後の世界はまさに語り得ぬものです。それは語りたい対象であるのはたしかですが、沈黙しなければなりません」と書いている。この文言を読んでいて、私は孔子の、「未だ生を知らず、いづくぞ死を知らん」を思い出した。多くの先達は、つまり「死後のことをとやかく考える暇があったら、現在を精一杯生き抜け」と教えているのだと思う。この1年間の私の死生観追求も、きわめて平凡なところに行き着いたようである。

立花氏はまた、「臨死体験は神秘体験などではなく、脳が見る“夢”に近い現象であることが科学的に明らかにされつつある」、「自殺、安楽死、脳死など、生と死に関する問題は一つの問題群として捉えるべきで、それはその人の死生観と切り分けられない問題なのです。どの問題を考えるにしても、結局、自己決定権がある場合は、その人の自己決定に従うしかないだろうし、神あるいは運命に決定権がある場合には、それに従うよりないことだろうと思います」、「“死はこわくない”という心境に私が到達したのは、臨死体験に関する新たな知識を得たからという理由以上に、年を取ることによって死が近しいものになってきたという事実があります。そういう意味で、私のように年を取った者の死と、若い人の死、あるいは不慮の災難、事故による死とは分けて考えるべきかもしれません」、「“死ぬのが怖くなくなった”といっても、“死後の世界は存在する。だから死は怖くない”と科学的な根拠もなく声高に断定する人たちもいます」、「ごく自然に当たり前のことを当たり前に、理性的に考えるだけで、死ぬのは怖くなくなるのです」と、書いている。私も同感である。

4. 「人間は死んでもまた生き続ける」 大谷暢順著 幻冬舎 2015年12月10日

帯の言葉:「この世かぎりの命だと思っていると損をする！ 仏教の真髄がわかれば、死が怖くなくなる、生きるのがラクになる」

本書は、本願寺法主である大谷氏の著書である。大谷氏は本書の冒頭で、「人はだれでも、人生の折り返し点をすぎたり、家族や友人、知人を失ったりすると、いやおうなく、自らの“死”を意識させられます。“死ぬのは怖くない” 本心からそう言える人は、はたしてどれぐらいいるのでしょうか」と問いかけ、「私は今すぐ死ぬのはご免ですが、“死”そのものを恐れてはいません。本のタイトル通り、“人間は死んでも、また生き続ける”と思っているからです」と答えている。大谷氏は昭和4年生まれというから、今年で86歳だろう。それでも、「私は今すぐ死ぬのはご免です」と書いている。たしかに大谷氏にとって、「死ぬのは怖くない」だろうけれども、きわめて「生への執着の強い」人物だと言わざるを得ない。私は釈迦の教えの真髄は、「執着心を捨てる」ことだと思っている。私は本願寺法主のいささか仏教離れた冒頭の文言に、驚かされた。本書の中で大谷氏は、「私流に申しますと、人生の成功や安泰を最終目的として、それに固執するよりも、死後の世界、つまり永遠の生命、魂というものに目を向けることによって、かえってその人生をも充実したものにすることができる、ということだと思います」と書いているのだが、なぜすでに天寿を全うしている大谷氏は、「今すぐ死ぬのはご免」なのだろう。本書の帯には、「この世かぎりの命だと思っていると損をする！」と、高僧の言らしくない俗っぽい

文字が踊っている。大谷氏には、**今すぐ死ぬと損をすることでもあるのだろうか。**

大谷氏はある本文中で、国際会議で知り合った外国人女性から、「人は死んでも生まれ変わるのだと考えることで、どんなにあなたたち東洋人は魂に安らぎを得ていることでしょうか」という言葉をかけられたと書いている。つまり大谷氏は、死後の世界を信じさせ、自らに「人間は死んでもまた生き続ける」と言いきかせ、「死は怖くない」と思い込ませようとしているのである。これは上述の立花氏とは真逆の思想であるが、現代日本の一つの死生観であると思う。しかし、多くの高僧の最期が、すべて「死への恐怖」を超越していたと言い難いことは、歴史が証明済みでもある。

5. 「人は生まれ変わる」 池川明・大門正幸共著 ポプラ社 2015年12月10日

副題:「前世と胎内記憶から学ぶ生きる意味」 帯の言葉:「決してオカルトではない。現実にあったことだけをここに」

本書は産婦人科医師の池川氏と、人間学研究学者の大門氏の共著である。本書で池川氏は、胎内記憶や中間生記憶の調査研究を通して、大門氏は前世記憶の調査研究を披露し、共に、「人は生まれ変わる」と考えれば、「死は怖くない」と結論付けている。なお、本書における大門氏の論考は、氏の前著とほぼ同じ内容であり、新説はほとんどない。これらはすでに紹介済みなので、今回は省かせていただく。

池川氏は、長野県で2003～04年に行った保育園の保護者(1620名)の調査の結果として、「自分の子どもが“胎内記憶について語ったことがある”」との回答が33%、“誕生時記憶について語ったことがある”は21%」、と書いている。これは驚くべき数字であると思う。ただし胎内記憶といっても、「妊娠中におかあさんがこんなテレビを見ていた」、「買い物途中で気分が悪くなった」、「おなかの中は暗かったけど、ふわふわしていた」、「周りがピンク色で水の中にいた」、「おなかの中から雲や道路が見えた。オレンジ色だった」などという類のもので、大門氏の書いている前世記憶と比べると、かなり単純素朴である。

池川氏は、「このところ、特に輪廻転生や魂に対する関心が高まっていると感じています。これは、合理的思考に慣れている現代人も、この世の中には科学では語り得ない何か、目に見えない何かがあり、肉体として生きるだけでなく、それを超えた意味を人生に求めているからに他なりません」、「では魂は、なぜ何度も転生をくりかえすのでしょうか。それは、過去生や現世でやり残した課題があるからと考えられます。いろいろな経験もしたいのでしょうか」、「来世で使命を果たすために現世がある。そう思えば、困難も、つらい出来事も勇気を持って乗り越えることができるような気がしませんか」と書いている。つまり、「人は生まれ変わる」のだから、「死は怖くない」し、「困難も乗り越えられる」と主張している。さらに、「私自身は、胎内記憶の研究を通して魂の存在を知り、死後に向かう中間生があることを確信していますので、**死を恐れる気持ちはありません**」と明言している。

現代科学について大門氏は、「科学的思考に慣れている現代人は、すべてを科学的根拠で説明しようとする傾向があります。しかし、私たちが生きる世界は、科学的根拠では説明できないことで溢れています。生きる意味や人生の価値について、科学は何も語ってくれません」、「まず何よりも重要なのは、科学的知識は基本的には“仮説”だということです」、「脳が

心を生み出している”とか、“死んだら終わり。心(意識)のようなものは残らない”というのはあくまで科学で本流とされる人たちによって受け入れられている仮説に過ぎず、実際にはその仮説に異を唱える研究者も大勢います」と書いている。池川氏は、「現代医学や科学は細分化し、数値化することを常とし、数値化できないことは評価されない傾向にあります。科学技術や高度な医療技術をもっているがゆえに、心を見る医療がなおざりにされてしまっているようにも感じています。しかし、出産や子育て、人生は標準化することも数値化することもできません。私たちに意識や感情があるように、子どもにも心があります。だから、心に寄り添い、そこを大事に見ていこうと思っているのです」と書いている。

6. 「老いた親を愛せますか」 岸見一郎著 幻冬舎 2015年12月10日

副題：「それでも介護はやってくる」 帯の言葉：「私たちにとって幸福とは何か？」

著者の岸見氏は、哲学者であり心理学者である。私は本書から、老いた親を介護する子の心情の、哲学的かつ心理学的解析を学べるだろうと思い、心を弾ませて読み進んだ。しかし残念ながら、その期待は外れた。本書で岸見氏は、自らの父親の介護体験を、訥々と語っているだけであり、それらは今までに多くの介護体験者が語り尽くしてきたものであり、そこには新鮮な見解はほとんどなかった。

いずれにせよ、介護については、格別に便利なノウハウはなく、とにかく老親が心地よく死を迎えるまで、根気強く、やり続けることである。時には腹が立ち言葉を荒げることもあるし、その自分の行為に対して自己嫌悪に陥ることもある。結局、思い直し、やさしい言葉をかけ直すことになるのだが、こんなことの繰り返し介護の実態である。それでも、その中から学べるものもある。やがて99歳になる私の母は、最近、排便しても自分ではうまくお尻が拭けなくなってきた。お尻が汚いまま、下着を履いて寝てしまうようになり、医者からはそのままにしておくとう膀胱炎になると言われているので、仕方が無く、妻か私がその都度母のお尻を拭かなければならなくなった。つい2日ほど前、私はそんな母に腹立たしくなって、「尻を拭かなければならない息子の気になってみろ」と怒鳴ってしまった。すると母は大声で胸を張って、「**光栄と思え**」と言い返してきた。この言葉を聞いて、思わず私は嘔き出してしまった。そして思った。これは母の本音か、ユーモアかと。介護とはこんなことの繰り返しである。

上掲著で大門氏は、「子どもたちはみんな、語りたいことをたくさん持っています。つたない言葉で要領を得ないこともあります。だからといって、“忙しいからあとでね”と話を中断したり、聴いてあげないのは実にもったいない。子どもたちは、大人が忘れていく多くのことを気付かせてくれます。そして、子どもたちと接したあとは、必ずあたたかく清々しい気持ちになるから不思議です」と書き、池川氏は、「人にとって何より大切なのは、一方的な発信ではなく、対話などの相互コミュニケーションです」と書いている。私は超高齢社会では、この「子どもたち」という言葉を、「老親たち」と入れ替えるべきだろうと思う。かつて、母はデイ・サービスから帰ってくるなり、いつも、その日にあったことを、口早に私に報告しようとした。私はまだ現役だったので忙しく、それにまったく耳を貸さなかった。そのことを今、私は悔やんでいる。

高齢者の介護から私たちが学ぶべき最も重要なことは、やはり、自分自身が次の世代の世話にならないような生き方をすることである。つまり足腰の丈夫なうちに、頭が自己決定力を持

っているうちに、死ぬことである。そのための死生観を確立することである。来年もまた、私はこのテーマを追い続けていきたいと考えている。残念ながら、まだ私も上掲著の大谷氏と同じく、「今すぐ死ぬのはご免だが」という心境から、脱し切れていない。

7. 「へろへろ」 鹿子裕文著 ナナロク社 2015年12月15日

副題:「雑誌“ヨレヨレ”と“宅老所よりあい”の人々」 帯の言葉:「ぶっとばせ貧老! 未来はそんなに暗くない」

この本は、一介の介護士、下村恵美子さんがデイ・サービス「宅老所よりあい」を、多くの人々の援助で立ち上げ、苦心惨憺し、特別養護老人ホーム「よりあいの森」の建設と開所に辿り着くまでの話を縦糸に、編集を業とする筆者の、「宅老所よりあい」の運営と、「よりあいの森」の建設への絡みを横糸にした物語である。それなりに面白い。なお、題名の「へろへろ」は、「よりあいの森」開所時の下村さんのあいさつの中での、(私も24年間がんばってきましたが、)もうへろへろです」との言葉からとられている。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11 月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12 月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年												
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-6.8	-8.9	27.7	0.0	13.7	15.3

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、() 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。